

# 帝都地下迷宮

中山七里

第九回

## 第五章 千里の林 万里の野

1

永沢からの知らせを伝えると、久ジイは驚愕きょうがくの後にがくりと肩を落とした。

「永沢くんを含めた二十五人……そうか。捕まってしまったか」

もちろん動揺したのは久ジイだけではなく、香澄と間宮、そして他の（エクスペローラー）たちも不安の色を隠しきれないでいる。

「永沢くんのケータイには、もう繋がらんのかい」

久ジイは未練がましく訊いてくるが、あの後何度も交信を試みた小日向は首を横に振るしかない。

「捕まって、どうされるっちゅうんだ。わしら何も悪いことはしておらんのに」

「地上には住むところがないから地下に住め。そう言われて光の射さないところに住んでいたのに、どうして今頃」

「元はと言えば、原因を作ったのは全部国じゃねえか。どうして俺たちが逮捕されなきゃいけないんだよ。逮捕されるんだったら、高速増殖炉の開発に携わったヤツらだろ」

地下住民たちの間からは次々と不安と抗議の声が上がる。今更だとは思ったが、住民たちの気持ちも痛いほど分かる。

だがさすがに長老だった。住民の声が大きくなる寸前、久ジイが皆を鎮めた。

「騒いでも、何も解決せんぞ」

「でも、久ジイ」

「騒いで何とかならんなら、事故が起きた時に何とかなったはずだろう。あの時だって日本中が大騒ぎしたが、結局は誰も救われなかったし、誰も責任を取らなんだ。所詮、わしらの声は届かん。届いたとしても、あやつらは聞く耳を持たん」

憤いきどおっているものの、どこか投げやりの口調がヘクスプロローラへ「私たちの心情を代弁していた。突きつけられた現実ふんぬに憤怒を感じても、テロ行為に走るような短絡さもエネルギーも彼らにはない。

だが不安を昂こじさせると理性が駆逐くちくされる。その先に待っているのは暴走だ。久ジイともあろう者がそれを知らないはずがない。

案の定、久ジイは間宮を手招きした。

「間宮先生よ、知っているんなら、あるいは推測できるんなら教えておくれ。逮捕された連中は、どんな扱いを受けると思う？」

間宮は（エキスプロロー）専属の医師だが、それ以外に久ジイを補佐する存在でもある。補佐の言葉が住民たちに与える影響は大きく、また間宮自身も自覚しているはずだった。

「逮捕されたからといって、正式な容疑は不法侵入です。こういう言い方が適切かどうかは分かりませんが、対外的には公園からホームレスを追い出すのと同じ理屈です。原発事故の被害者の存在を隠蔽いんぺいするために、逮捕者を公開することはないでしょうけど」

「表沙汰にはせんということか」

「全員が乾皮症かんびしょうを患わずらっているので、警察病院なり指定の医療機関に入院はさせるでしょう。死刑確定囚かかだって病気に罹かかれば治療させる国ですからね。しかし、死刑囚並みに自由はなくなると思います」

そもそも陽の光の下ではまともに生活できない時点で自由が剥奪はくたつされていると思うのだが、間宮が話しているのは法的な制限についてだった。

「外部はおろか仲間同士との通信も、監視や検閲おそをされる惧おそれがあります。元より色素性乾皮症いまは、未だに完治法が見つかっていません。（エキスプロロー）の存在を外部に洩はらすまいとしているのな

ら、警察や医療機関も敢えて治療法を探す努力はしないでしよう」  
「飼い殺しという意味かね」

「捕獲した害獣にエサをやる積極的な理由はありません」

害獣、という言葉に何人かが顔を顰めたが声には出さない。発した間宮本人が苦々しい顔をしているからだろう。

「個人的な意見ですが、これは選択の問題だと思います」

「選択肢というのを挙げてくれんかね」

「まず投降して警察に身柄を確保されるというチョイスです。この場合、今言ったように空調のある病室と清潔で安眠できるベッドが約束されますが、二度と病院の外に出られる機会はないでしょう」

「籠かごの鳥、か」

「一方、逃避行を続けていけば公安部はますます我々を確保しよう  
と躍起になるでしょう。こちらの人間は七十人以上で、しかもその  
多くが高齢者です。疲労も蓄積されるし、途中で脱落する者が出て  
くるかもしれない」

「ふふん、そっちは野に放たれた手負いの老鳥か」

「いい喩えたとですね。エサを求めるにも罅ねぐらを探すにも苦勞するでしょう。しかし天敵から逃げ果すことができたとしたら、少なくとも行動する自由と、己の……」

不意に間宮が口を噤つぶむ。

「どうした、間宮先生。続けてくれ」

「……己せいざつよだうの生殺与奪の権利を手中にできます」

「それが野垂のたれ死じにになつてもかい」

「医者いしゃの立場から言わせてもらえれば、死に場所を選べる自由は決して小さくありません」

小さくないと言いながら、最後の声は消え入るようだった。医者いしゃの目線で喋しゃべっていても、不治の病に侵された患者の気持ちを知っているからだろう。

「みんな、今の間宮先生の話を聞いてくれたか」

久ジイが呼び掛けると地下住民のほとんどが頷うなずくが、中には俯うつむいたままの者もいる。統率は取れているが、軍隊式ではないところがへクスプローラーゆえんたる所以ゆえんと思えた。

「間宮先生が示した選択肢、わしも同感だ。捕まつて警察の管理下に置かれるか、それとも逃げて逃げて逃げ抜いて野鳥の誇りを守るか」

隣のホームではそろそろ通勤ラッシュが始まっている。電車もひっきりなしに滑り込んでくる。多少の大声を上げてもかき消されるという安心感からか、久ジイはしわがれた声を張り上げる。

「長老おだなんぞと煽おだてられておるが、わしは皆を統率しておるつもりもなければ、そんな器量も持ち合わせておらん。だから皆が二択の

うち、どちらを選ぶかはそれぞれの自由だ。投降したい者は投降すればよし。一緒に逃げたい者はわしや小日向くんと行動をともしずりやええ。どっちを選んでも怒りもせんし恨みもせん。抜きたい者は今すぐ手を挙げておくれ」

不意に、隣のホームの喧騒けんそうが遠くなったような気がした。

久ジイの問い掛けは優しく、しかし苛烈かれつだった。己の安全を確保して仲間と絶縁するの、それとも危険の淵に身を投じて同じ境遇の人間と暮らしていくのか——改めて考えてみれば究極の選択ではないか。

久ジイが皆の反応を待っていると、そのうちぼつぼつと手が挙がり始めた。周囲を見回し、趨勢すうせいを確かめてから手を上げ下げする者もいる。

「ありがとう。手を挙げた人は、悪いが横に退どいてくれんか」

ぞろぞろと一団の中から出ていく者たちがいる。およそ三分の一程度。小日向が数えてみるとその数二十七人。これで残りは五十人を切った計算になる。

群れを離れた二十七人は例外なく申し訳なさそうな顔をしていた。「そんな顔しなさんな。人には人の事情がある。わしらはこれからも逃亡を続けるが、無事を願っていてくれ」

抜けた二十七人のうち数人が、「久ジイ」と切ない声を洩らす。

「抜けた俺たちは、どこに行けばいいんだ」

「と、いうことだが、間宮先生からは何か要望があるかね」

話を振られた間宮は助けを求めるように小日向を見る。逃走の立案者であるお前が喋れと目が語っている。気後れはしたが、ここは自分の役割と覚悟して手を挙げた。

「あの、僕からのお願いなのですが」

声の上擦うわすってしまうのは愛嬌あいきょうだ。

「投降のタイミングは皆さんにお任せします。この旧表参道駅に残っていただけでも結構ですし、元の萬世橋まんせいばし駅に戻ってもらっても構いません。最寄りの交番に駆け込んだり、いっそ警視庁公安部に出頭するのもいいでしょう。要は分散して欲しいんです。自分一人の身柄を確保させるために、できるだけ多くの警察官を引き付けてください。そうしてくれると、追手の数を減らすことができます」

「どうかな、みんな。小日向くんの提案を聞き入れてくれるかな」

投降を決めた二十七人はただ頷き、一人ずつ離れていく。

「済まないな、久ジイ」

「みんなを頼むよ、間宮先生」

「香澄ちゃん、くれぐれも気イつけろよおっ」

中には声を詰まらせる者もいて、愁嘆場しゆうたんばが苦手な小日向は少しの間顔を背けるそむ。見送る側の者たちも未練たっぷりの様子だったが、

図らずも作戦参謀にされてしまった小日向としては寸暇すんかも惜しまな  
くはならない。

小日向は久ジイに向けて声を潜める。

「萬世橋駅で捕まった人たちや、今から抜けていく人たちの間から  
情報が洩れる心配はありませんか」

「参謀としては気になるところだろうが、安心して構わんよ。わし  
は住民の一人一人を知つとるが、一人として国を好いている者はお  
らん。拷問されたって仲間は売らん」

「さすがに今の時代、拷問はないと思えますけど、公安部の尋問は  
執拗しつようだと聞いたことがあります」

「どうせ長生きできそうな人間は少ない。そういう者が護ろうとす  
るのは自分よりは絆と義理人情だよ」

二十七人が現表参道駅ホームの方向に姿を消すと、小日向はなけ  
なしのリーダー・シツプを發揮して残り五十人足らずに向き合った。

「不測の事態が生まれました。本来の予定だと、この旧表参道駅ホー  
ムでしばらく警察の動静を窺うかがうつもりだったんですが、悠長ゆうちやうなこ  
とは言つてられなくなりました」

またぞろ何人かが不安げな素振りを見せる。

駄目だ、やっぱり自分はリーダーに向いていないのだと後悔する。

彼らを鼓舞こぶし導かなければならないのに、言葉の選択を間違えて逆



効果になってしまふ。

「お疲れの方もいらっしやるでしょうが、公安部は予想以上の動きを見せています。我々もどうかかしてられません。すぐここを発つて博物館動物園駅に向かおうと思います」

せいぜい勇ましく宣言したつもりだったが、聞いている側の反応は思わしくない。

「朝飯も食べてないんだが」

「久しぶりに長距離を移動して疲れとる」

「せめて二、三時間は休憩できんかね」

「本当に、もう一刻の猶予ゆうよもならないんです」

小日向に対する信頼度はまだまだのようで、住民たちの危機感を刺激するには不十分らしい。久ジイに目配せめくばをすると察してくれた。

「みんな。二十七人は己の都合だけで抜けたんじゃない。自分がいたらわしらの足手まといになると考えたからだ。その気持ちを無駄にしてはいかん」

皆を統率していないと言いながら、久ジイの言葉には力と重みがある。これが年の功というものか、あれだけ噴出していた不満がぴたりと止んだ時には思わず苦笑やしそうになった。

「さ、小日向くんよ。ここからの行程を説明してやってくれ」

今更説明もへったくれもない。通勤客に紛れて博物館動物園駅を

目指すだけだ。

「まず銀座線で上野駅に向かいます。上野駅からは徒歩で京成上野駅まで。博物館動物園駅はその隣になります。問題は始発と違い、多くの通勤客と同じ車両に乗らなければいけないことです」

案の定、説明を聞いている住民たちはそわそわし始めた。

「身なりはもちろん、ブルーシートを抱えていたら目立つこと請け合いです。ここに残っているのは四十七人。誰一人として目立つてもらっては困ります。従って、ここからの行動は着の身着のままということになります」

「着替えはどうする」

「埒作るのにも色々材料が要るんだぞ」

「日用品やら段ボールやらは現地調達してください。今は皆さんの安全を確保するのが最優先なんです」

不満はあるものの、彼らなりに納得したのでろう。住民たちはぶつくさ言いながら、手にしていたブルーシートや食器類を地べたに置き始めた。

残り四十七人を一遍に移動させるのは困難なので、やはり二組に分ける。第一班は小日向と香澄、第二班は久ジイと間宮が先導を務めることになった。

「一日のうちでこれだけ電車を乗り継ぐのも久しぶりだな」

出発の支度をしながら香澄が呟く。逃避行なのに悲愴さが微塵も感じられないのは若さゆえのものか、それとも性格か。おそらく両方だろうと小日向は思った。

「さつき、久ジイも似たようなことを言ってたな」

「あたしら地下住民でだけで、別に日がな一日駅から駅に移動している訳じゃないからね。他の人はともかく、あたしはちよっと新鮮」

「それは何より」

「でも、まさか小日向さんとペア組んで（エキスプロラー）の脱出作戦、実行する羽目になるとはねー」

香澄はこちらを見てにやにや笑う。

「あの不審な鉄オタが今やあたしたちの作戦参謀なんだから、世の中分かんないよねー」

「不審な鉄オタはひどい」

「メトロの作業員服着込んでまで廃駅に忍び込むようなオタクが不審者じゃなきゃ何だったのよ。でもまあ、今回はそのオタクっぷりが役に立っているから」

憎まれ口のようなだが、感謝の念は伝わってくるので悪い気はしない。

「あたし、博物館動物園駅で知らないんだけどさ。いったいどんなところなの」

小日向のオタク心に火が点いた。危急存亡の秋にも拘わらず、己の知識を披露するとなると、途端に舌が滑らかなになるのは仕様だ。「元々は上野公園にあった京成電鉄の駅だよ。戦前は東京帝室博物館や東京科学博物館、東京音楽学校・東京美術学校の最寄駅だったんだけど、老朽化と利用者数の減少が理由で営業廃止になった」「へえ。由緒正しい駅なんだ」

「東京帝室博物館は皇室用地だったから余計にね。しかも建築時期は国会議事堂よりも古いときている。しかしいくら由緒正しくても採算が合わなけりや用無しだ。とにかく利益優先だからね」

蘊蓄を語る頭の隅で、ちらりと過るものがある。その昔、帝都と呼ばれた時代は、現代とは比較にならないほど国家権力が強大だった。国家権力が強大になればなるほど、臣民は虐げられる構造になっている。

八ヶ部町民もまた国策に翻弄され、今もなお国家権力に自由を奪われようとしている人々だ。彼らの逃げ回る先、落ち着く場所が全て帝都の時代に建設された迷宮というのは、ひどく因縁めいたものを感じさせる。何のことはない。昔も今も、国から虐げられる者は存在するという真実がここにある。

「もう一つの理由はホームの有効長が短かったからだ。当時でも一番短い四両編成の電車の先頭部分がホームからはみ出していた。昭

和五十六年以降には普通電車の一部が六両編成になったものだから、この駅を通過する電車がが増えて、乗客の多くが隣の京成上野駅を利用するようになって……」

「あのさ。気持ちよさそうに喋っているところ悪いんだけどさ。だったらそのホームって極端に狭いってことだよね」

「ああ、狭い。だから本音を言うと、〈エクスプローラー〉全員を収容するのにスペースの点で不安があった」

「あった？」

「図らずも人数が半分以下に減ったから、問題は自己解決した」

「あ……」

「狭いといってもホームは上下線ともあるから、五十人程度ならしばらくは生活できると思う」

現状を再認識した体の香澄は、言葉を失う。

「今はとにかく彼らを安全な場所に移動させなきゃならない。でも悲しいかな、僕はみんなからまだ全幅の信頼ぜんぷくを置かれていない。だから香澄ちゃんとコンビを組ませたんだと思う。みんな、香澄ちゃんちゃんの言うことなら聞いてくれるからね」

「あー、あたし頼りなんだ」

「そうだよ」

いささか挑発気味の香澄に、小日向は逆らいたくない。

「できないことを悔しがってもしょうがないし、できるヤツに任せ方がスムーズになるならそうする。みんなを危険から護ろうとする場合なら尚更だ」

なおさら

香澄は少し紅潮したようで、すぐに顔を背けた。

「じゃあ出発します」

作業員姿の小日向が現ホームに繋がるドアを開ける。乗客の降りりでごった返している隙を窺いながら、一人また一人と現ホームへと出ていく。浅草行きの電車がやってくるとラッシュの客に紛れて乗り込む。もちろん既に席は埋まり、二人とも立つことになる。

香澄はそれとなく見回して第一班の全員がいるかどうかを確認する。満席どころか立錐の余地もなく、乗車率は百五十パーセントとあったところか。老いた地下住民には気の毒だが、この混み具合なら多少立ち居振る舞いや風体が怪しくても気づく者も少ない。そもそも身動きが取れないので、怪しい行動もできない。まさに怪我の功名名だった。

上野まで十四駅、およそ三十分。この区間を何事もなくやり過ぐす。小日向と香澄は彼らの監視役でもある。

「一つ聞いていい？」

香澄が窮屈きゆうくつそうに、こちらへ顔を向ける。

「小日向さん、いつもこういう状態で通勤してたの」

「僕に限らず、大半の勤め人がこうじゃないかな。まだ銀座線はマシな方で、この時間帯の東西線は乗車率二百パーセントだよ」

「二百パーセント。何それ。毎日そんな電車に乗ってんの？ 変でしょ。そんなの、会社に着く前にへろへろになっちゃうじゃない」

「押しくらまんじゅう饅頭みたいなものだから、ウォーミング・アップにはちようどいいって意見もある」

「うわ。通勤の段階からブラック企業」

「みんな、闘っているんだよ。君たちほどじゃないけどさ」

小日向も香澄と同様、他の地下住民の様子を見守る。第二班に間宮がいてくれるお蔭で、病人はそちらで担当してくれることになっているが、第一班にも老人は多い。三十分間も立ちっ放しでたお斃れはしまいかと気を揉む。

「誰か具合が悪くなったらどうするのよ。病人だからってメトロの職員さんに預ける訳にいかないでしょ」

「その時は乗客に席を譲ってもらおう」

「そんな都合のいい……」

「東京ってさ、冷たい人は冷たいけど、それ以上に親切な人も多いよ」

住民たちの体調もそうだが、それより何より公安部の動きも気になる。この車両の中に紛れ込んでいる可能性は決して無視できない。

小日向は己が周囲から怪しまれないように、不審な動きを見せる乗客がいなかを探る。地下住民に半分、公安部刑事に半分といった具合に注意を払っていると、次第に疲労を覚えてきた。

考えてみれば徹夜が続いている。今の今まで気が張っていたから持ち堪えていたが、元々無理の利くような強靱な身体ではない。疲れている寝ていないと自覚すると同時に、一気にツケが押し寄せてきた。

がくり、と膝が曲がる。

「ちよっ。どしたのよ、小日向さん」

「今更、体力の限界がやってきた」

「やめてよ！ 選りに選ってこんな時に。まだずっと乗ってなきゃいけないのに」

途中下車は無理だ。住民たちを香澄一人に任せるのも心配だし、十分や二十分休憩して回復できるような疲れではない。

せめて追手がいないと確信できれば、もう少し気楽なのだが——  
そこまで考えて、小日向は嫌な事実に思い至った。

公安部に知られている顔は小日向一人だけだ。

いや、死んだ輝美から様々な情報が洩れているかもしれないが、正式に取り調べを受けて顔も身分も明らかになっているのは他ならぬ自分だ。もし自分が追う立場であれば、顔も知らない住民よりは



小日向を尾行するだろう。

しまった。

尾行っけられているのは自分だ。

朦朧もうろうとし始めた意識に活を入れ、小日向は自分に注がれている視線を探索する。

「香澄ちゃん。誰か僕を監視していないか注意して」

「言われなくても、さっきからしてる」

「え」

「顔が割れてるの、小日向さんだけなもの」

香澄の方は、最初から織り込み済みだったということか。

「それで早速なんだけどさ。後ろの優先席に座っている男の視線が怪しい」

「何だって」

「顔動かしたら駄目だって」

危うく振り返るところを香澄に制される。

「小日向さんのスマホ、ミラー機能ついてる？」

「ああ」

「何気なくよ。ヘアスタイル気にするふりして、何気なく後ろを見  
てみてよ」

言われるまま、取り出したスマートフォンスマートフォンの画面を鏡に変えて、

そつと背後を写し出す。

いた。優先席の端に座ったサラリーマン風の男が二人。くたびれたスーツを着ているものの、目は少しも疲れていない。鏡の中から、じつとこちらを睨んでいる。

「どう思う？」

「自分が同性から熱い目で見られるタイプだと思う？」

「だよな」

もし自分を監視しているのなら、こちらの行動に合わせてくるはずだ。

「次の赤坂見附あかさかみつけで降りる」

「その後、どうするのよ」

「黙って見ていてよ」

やがて電車が赤坂見附駅のホームに滑り込む。

『赤坂見附、赤坂見附』

アナウンスと同時に扉が開き、どつと降車する客が殺到する。

今だ。

小日向は降車客の流れに乗り、ホームに出る。スマートフォンを覗くと、件くだんの二人組も優先席から立ち上がったところだった。

入り口付近は降車客と乗車客で、まるで身動きが取れない。人の流れに身を任せるようにして移動するのが精一杯だ。背後にいる二

人組も同様だった。小日向との距離を保ちながら後ろをついてくる。  
『ドアが閉まります。ご注意ください』

横目でドア付近を見る。駆け込み乗車の客も呑み込んで、左右の  
ドアが閉まり始めた。

次の瞬間、小日向は踵かかとを返して駆け出した。改札に向かう客たち  
を掻き分けてドアに突撃する。

「ちよっと！」

「押すなよ、おい」

苦情に耳を傾ける暇などない。残り五十センチほど開いた隙間に  
身を滑り込ませると同時にドアが閉まった。

間一髪。

窓の外を見ると、二人組が目を見開いていた。まさか、こんな古  
典的な手に引っ掛かるとは思ってもみなかったに違いない。何しろ、  
仕掛けた小日向自身が驚いているくらいだ。

人ごみを掻き分けて元の場所に戻ってくると、香澄が呆あきれたよう  
な顔をしていた。

「本っ当、見掛けによらないことするのねえ。でもお見事」

「うん。上手くいくとは自分でも思ってたな」

「でも、少しくらいは勝算あったんでしょ」

「赤坂見附駅は銀座線の中でも乗降者数が五番目に多い。因ちなみに上

位は新橋駅、日本橋駅、渋谷駅、表参道駅。新橋駅まで行くと目的地に近くなるから、赤坂見附駅で降りたのはベターな選択だと思う」「ひょっとして銀座線だけじゃなくて、全路線の乗降者数とかも把握してたりして」

「オタクだぜ。当然じゃないか」

小日向がそう答えると、香澄は一瞬だけ気味悪そうにこちらを見た。

表参道駅から二十数分、そろそろ地下住民たちの疲労が色濃くなった頃、ようやく電車は上野駅に到着した。

「ここからが正念場だから」

小日向が話し掛けると、香澄は表情を引き締めた。

まず小日向が降車して、周囲に刑事らしき人影がないかを確認する。香澄は乗り越してしまう住民がいなかったかを確認して最後に下りる。

上野駅は通勤・通学客もさることながら外国人観光客の利用も多い。彼らはおしなべて長身なので、小柄の者が多い「エキスプローラー」たちの遮蔽壁しやいへきになってくれる。

ここから五分も歩けば京成上野駅だ。

「もうひと息です」

振り返ると、香澄に後押しされる住民たちは一様に疲弊ひげいしていた。

一団に固まっては怪しまれるので、それぞれの間隔を保ちながら歩く。最後尾を歩く香澄が脱落者がいないかチェックしてくれるので、誰かを置いてけぼりにする心配はない。

京成上野駅に到着すると、一人ずつホームに招き入れる。最後に香澄を迎えたところでひと息吐いた。

「脱落者、いなかったよね」

香澄は親指を立てて応える。

「で、これからどうするのよ、小日向さん」

「どのみち地上口は閉鎖されている。博物館動物園駅へ行くには現ホームから侵入するしかない」

小日向はホームの端を指差す。その方向には〈避難口(旧博物館)〉の誘導表示があった。

「現在、博物館動物園駅のホームはトンネルの非常用避難路になっている。だから非常灯が点いていても、滅多に職員の入りがない」  
作業着姿の小日向は、そう言うときまた線路に飛び降りた。

## 2

香澄たちを招き入れる手順は旧表参道駅侵入の際と寸分変わらな  
い。いったん線路に下り、内側から避難口の扉を開ければいいだけ

だ。

最後の一人が入ったのを確認し、二列になって線路の上を歩く。非常灯が足元を照らしてくれているので、少なくとも転倒する危険はない。

しばらく進むと、目指す廃駅のホームが見えてきた。

「あれだ」

実を言えば、博物館動物園駅を訪れたのは小日向も初めてだった。長さは四両分で上下互い違いのホームは、現在ではまずお目に掛かれない。それだけでも廃駅マニアの心をくすぐるのだが、非常灯に浮かび上がった構内は更に魅惑的だった。

利用者減少と老朽化が理由の廃止だったので、施設のほとんどは当時の状態を保っている。地下道、地上へ続く階段、案内表示などはそのままだ。壁面には象とペンギンの絵画が掲げられており、その隙間を埋めるようにして数多の落書きが施ほどこされている。元々が中川俊二設計による西洋様式の施設であるため、欧米の地下鉄にあるような落書きが、不思議に調和を見せている。廃駅独特のうらぶれた雰囲気とは趣おもむきを異ことにするが、これはこれで味わい深いものがある。

「あ。想像してたより、ずっと広い」

ホームを見た香澄が感嘆の声を上げる。

「それに明るい。非常灯と言っても馬鹿にできないよね」

「避難路だからね。いざとなった時に足元が暗かったら避難路の意味がない」

「これならしばらくは住めそう。放置してある資材を見繕みつくろえば、簡単な住宅くらいは作れそうだし」

香澄は皆を安心させたために気楽なことを言うが、元よりここも安住の地ではない。公安部の動向を横目で見ながらの生活で、しかも現ホームが真隣にあるのでいつ職員や乗客から目撃されるかもしれず、いずれにしても長居はできない。

到着したばかりで希望を掴み取るような話をしてもし方ないので、黙っていようと思った。自分などが口にしなくても、彼らは勘付いているはずだ。

その時、小日向のスマートフォンが着信を告げた。表示された発信者を見て驚いた。何と瀬尾ではないか。

「はい、小日向です」

『おい、どうした。無断欠勤か』

挨拶あいさつもなく藪やぶから棒だったのが、瀬尾の声を聞いて初めて登庁時間を過ぎていることに気づいた。

地下住民百人の逃避行を先導するなどという非現実的な行動をしているうちに、すっかり忘れてしまっていたのだ。

『いちいち電話するのもお節介かと思つたが、早速お巡りさんがや  
つてきたもんだからな』

「今日も来たんですか」

『いつもなら始業三十分前に出勤しているヤツが、警察の事情聴取  
を受けた翌日に遅刻しているんだ。刑事でなくてもおかしいと思うぞ』

瀬尾の口調は穏やかだが、話している内容は危険極まりない。

『ひよつとしてヤバイ局面なのか』

先日も瀬尾には虚勢きよせいを張つたばかりだ。舌の根も乾かないうちに  
現在の危機を説明するなど、いい恥さらしではないか。

「あの、ですね」

『言ったよな。前言撤回はアリだつて。タイムオーバーじゃなけれ  
ば、いつだって何とかなるんだ』

小日向は束の間つか、言葉を失う。勤務先に刑事が乗り込んできても  
尚、瀬尾は小日向に手を差し伸べてくれている。好き好んで警察沙  
汰に首を突っ込む者はいない。ただのお節介で火中の栗を拾う者も  
いない。瀬尾の親切心はとても気紛れきまぐと思えない。

不意に後ろ盾のなさおびに怯える。〈エクスプローラー〉に定住の場所  
を与えた官僚を頼ることはできない。原発推進派にとって邪魔者と  
化している彼らを護る者は一人もいない。頼りになるのは辛うじて  
医師の間宮だけで、おまけに四分の一は公安部の手に落ちてしまつ



た。

孤立無援に加えて徒手空拳<sup>とじゆくうけん</sup>。そもそも、いち小市民、いち鉄道オタクの自分が難民を引き連れて地下空間を逃げ回っている現実が既に絵空事ではないか。

職場の先輩に仕事以外で迷惑をかけるつもりはないはずだった。だが心細さが信条を曲げた。自分は強い人間ではないしヒーローでもない。それなら、一度くらいは弱音を吐いても許されるのではないか。一度くらいは助けを求めても責められないのではないか。

「瀬尾さん、今更だけど手を挙げてもいいですか」

小日向はそう伺いを立ててから、大きく息を吸い込む。

「ちよっと長い話になります」

『お前みたいなヤツが巻き込まれるんだから、そうに決まってる。

いいぞ、話せよ』

水を向けられたら一気呵成<sup>じつきかせい</sup>だった。廃駅ファンが昂じて萬世橋駅に降り立ち、〈エクスペローラー〉の存在を知ったこと。〈特別市民〉の称号を与えられて彼らの相談に乗ったこと。輝美の死体遺棄に加担したこと。そして現在、公安部から逃げ回っていること——他人に打ち明けてみると、改めて濃密な日々だったと自覚した。波乱万丈の人生を早送りで過ごしたような感覚がある。

話した当人が半ば呆れ気味なのだから、聞いている方は尚更だろ

う。予想通り、瀬尾は電話の向こうで嘆息した。

『どっちにしてもすごい話だな』

「何がどっちなんですか」

『ホラ話にしてもブツ飛んでる。リアルな話にしたらヤバ過ぎる。原発被害者を闇に葬るために公安部が暗躍するなんてふざけた話だ』

「僕もそう思いますよ」

『しかし八ヶ部町で高速増殖炉の事故があったのも、黒沢輝美という女が殺されて死体を遺棄されたのも現実だ。お前に妄想癖があるとも詐話症だとも思えない。だから、きっと本当なんだろうな』

「信じてもらえますか」

『信じるだけなら大した労力はないしな。で、いったい俺はどうしたらいいんだ』

改めて問われると、ひと言も返せない。瀬尾たちを巻き込む訳にはいかないし、そもそも何をどうしたら巻き込んでしまうのかさえ分からない。

しばらく考えても結論らしきものは出なかった。

「あまり気にしないでください、瀬尾さん」

『あのな、そんな突拍子もない話を聞かされて、気にすんなってのが無理だぞ』

「誰か知ってる人に愚痴をこぼしたかったんだと思います。それが瀬尾さんでよかった」

『おい、ちよつと待て』

「山形課長には、当分病欠になると伝えておいてください」

病欠の件は、つい自嘲的になる。警察に確保されるか、それとも（エクспローラー）とともに逃避行を続けるか。いずれにしても、

職場復帰はどこか遠い世界の出来事のように思えてくる。

『待てたら』

「それじゃあ」

通話ボタンを切ると、寂寥せきりょうが胸に迫った。通話を切った瞬間、己と日常を繋いでいた線も切れたような気がした。

「えっと」

後ろに立っていた香澄がおおずと口を開く。

「今の話し相手、会社の人？」

「うん」

「本当に今更だけど、ひどいことに巻き込んだね」

言われて思い出した。

よくよく考えれば、小日向自身がとぼちちりを食った事件だったではないか。

「迷惑かけたと思ってる」

香澄は珍しく殊勝しゅしょうだった。小日向に対し、俯き加減で話すのもこれが初めてだった。

「あたしたちと知り合う前は普通の公務員だったものね。あたしたちと知り合わなけりゃ、今頃はさっきのサラリーマンさんたちと同じように出勤していたんだものね。結局、あたしたちは小日向さんから色んなものを奪っちゃったんだよね。ごめん」

「香澄ちゃんが謝る必要はないよ」

これも虚勢だったが、もう構わない。自己陶醉とくすいと嗤わらう者は嗤わらえばいい。まだティーンティーンの女の子にここまで言わせて当然と思うような人間にはなりたくない。

「そう言や、久ジイにも似たようなことを言われたなあ。確かに最初はアクシデントだったけど、途中からは僕の意味で首を突っ込んだんだ。いいカッコする訳じゃないけど、アパートと区役所を歩き来するだけじゃ得られないものを手にしたと思っっている。だから、これはせめてもの恩返しだ。巻き込まれる？ 上等だよ。首どころか全身浸ひかってやるよ」

「……ありがとう」

ところが感慨ふけに耽ひる間もなく、またも着信があった。今度の相手は間宮だった。

「はい、小日向です」

『やられた』

間宮の声は掠れ気味だった。

『表参道駅も公安部に急襲された』

端末から洩れた声を聞き、香澄が顔色を変えた。

「まさか間宮先生」

『あつという間の出来事で、碌に抵抗らしい抵抗もできなかった。電車に乘ろうと待機していた第二班のほとんどが連れていかれた』  
ずん、と腹が重くなる。

地下鉄を乗り継いで、廃駅から廃駅を渡り歩く——廃駅マニアの自分だからこそ提案できた作戦と内心得意に思っていたが、とんでもない勘違いだった。公安部は猫がネズミを追い詰めるように、的確に間合いを詰めてくる。小日向たちの臭いを嗅ぎ当て、足跡をたどりながら着実に迫ってきている。認めたくはないが、相手は追跡のプロでこちらは素人の集団だ。

考えの甘さを反省したいが、今はそれどころではない。

「久ジイは」

『わたしと久ジイ、そして数人は難を逃れた。今、銀座線に乗って、そちらに向かっている最中だ』

「何人、助かりましたか」

『わたしと久ジイを含めて七人』

七人。これで残りは小日向を加えても三十人程度まで減った計算になる。

「今、どの辺りですか」

『青山一丁目を過ぎたところだ』

小日向の脳裏に東京メトロの路線図が広がる。どこの駅でどの線と乗り換えできるかは全て暗記している。

「次の赤坂見附駅で降車してください」

『降車してどうするんだ』

「丸ノ内線で乗り換えて大手町へ。大手町で半蔵門線に乗り換えて今度は三越前へ。三越前に辿り着いたら、また銀座線に戻ってこちらへ向かってください」

『……ずいぶんと迂回うかいするんだな』

「今の時間帯はまだぎりぎりでラッシュアワーです。今言った駅では通勤客でこった返しているはずだから、人ごみに紛れて逃げ回るには格好の場所です」

『分かった。やってみる』

畜生、と思わず毒づいた。

高齢の久ジイを連れているだけで間宮はハンデを背負うことになる。迂回すればするほど体力を消耗するだろうが、今はこうする以外に追手を撒まく方法を思いつかない。

香澄は黙っているが、心穏やかでないのは握った拳が震えているので分かる。無事に辿り着いた者たちも不安の色を隠しきれない。

再考が必要だと思った。

公安部の目を盗むことさえできれば、当分（エキスプローラー）たちには博物館動物園駅で寝泊まりしてもらおう予定だった。公安部とてこの一件にかかりきりになる訳にはいかないだろうから、いつかは追跡の手も緩くなってくる。頃合いを見計らって、全体を三分の一程度ずつに分け、それぞれ旧表参道駅と萬世橋駅に戻ってもらう計画だった。警察も一度搜索した場所を再び探そうとは思わないのではないか。

ただ一点気になるのは、輝美を殺害した犯人の件だ。

公安部から逃げ回ることに集中して気に留める間もなかったが、彼女が殺害された状況を考えれば、犯人は十中八九（エキスプローラー）の一人だ。それが誰なのか確認も推理もできないままに流されたが、依然として犯人は何食わぬ顔をして逃避行に紛れている。

彼または彼女は、確保された仲間に入っているのだろうか。それともまだ逃げ果せて、小日向たちと合流しているのだろうか。

いずれにしても輝美殺しの犯人が逮捕されない以上、公安部が諦めたとしても刑事部は我々を追い続ける。殺人の時効は撤廃されているから、それこそ未来永劫に亘<sup>わた</sup>って捜査を継続するだろう。

小日向は胸の裡つらでもう一度毒づいた。

内部には殺人犯を抱え、外からは公安部と刑事部に追い掛けられる。ないゆうがいかん内憂外患とはこのことだ。せめて近くに間宮と久ジイが到着してほしいと願う。小日向と香澄だけではどうにもならない問題も、あの二人がいてくれれば何とかなる。

間宮から連絡があったのは、それから一時間後のことだった。

『今、京成上野駅に着いた』

連絡を受けた小日向が避難口のドアを開くと、向こう側から間宮と久ジイが顔を覗のぞかせた。

「ひどい目に遭あった」

久ジイは間宮の背の上で、そう愚痴った。

「間宮先生。ひよつとして、ずっと久ジイをおぶってきたんですか」

「ずっとじゃない。赤坂見附駅を降りて丸ノ内線に乗り換えるまでは、自力で歩いておったわ」

逆に言えば、そこから先は間宮が背負い続けたということだ。

「ここからは僕がおんぶしますよ」

「ああ、頼む」

ひたひ額の汗と息遣いで間宮も相当疲労しているのが分かる。小日向が交代を申し出ると、あっさり応諾おうだくした。



「あれは奇襲みたいなもんだった」

小日向の背中中で、久ジイは襲撃された際の模様を語り出した。間宮と他の住民五人もぞろぞろと後をついてくる。

「小日向くんたちがホームを出て、さあ次はわたしたちの番だと待ち構えていたら、いきなりホームの両側から挟み撃ちされた」

「警官は何人くらいいたんですか」

「十人はいたかな。薄暗がりに紛れてわたしたちは逃げ果すことができたが、後の者は警官から剥がすのも無理だった。咄嗟とつさに動けたのはこの七人だけだな」

「じゃあ病気がちの人とかは」

「置き去りにする以外になかった。無念だよ。無念極まりない」

久ジイは面目めんぼくなさそうに拳を固めていた。

「この上は表参道で離脱した者たちが、せいぜい警察を攪乱かくらんしてくれるのを祈るばかりだ」

久ジイはそう言ったが、正直あまり当てにはならないと感じていた。日本の警察は有能だ。殊に公安部は独自の捜査網くまを持つとも聞いた。地下構内に設置された数多の防犯カメラを隈なく解析かいせきしていけば、小日向たちの動きを察知できるのかもしれない。

そろそろこの作業着も用を為なさなくなった惧れもある。事によれば、博物館動物園駅にしばらく逗留とじゅうするという計画も、早急に見直

す必要がある。

だが博物館動物園駅を出て、次にどこへ移るといいのか。残念ながらそこから先は考えていなかった。

自分以外で廃駅の知識が豊富な者はいたのだろうか——記憶をまさぐっていて、頭に浮かんだ面々がいた。

〈中野レールウェイ〉に集うオタク仲間。彼らなら知っているかもしれない。幸い店の電話番号は登録したばかりだった。

久ジイを背負いながらスマートフォンを取り出し、早速電話をかけてみた。

『はい、〈中野レールウェイ〉』

マスターの声がひどく懐かしく感じられた。

「小日向です。今、そこに常連さん揃ってますか」

『全員じゃないけど、主だったところはいるよ』

「忙しいところ申し訳ないんですけど聞いてみてください。地下の廃駅で、滅多に人が出入りせず、電車も通過しない場所が何カ所あるのかを」

『廃駅は小日向さんの守備範囲でしょ』

「僕だけの知識じゃ足りないんです」

『今、どこから電話かけてるの』

「すみません、ちよつと言えないんです」

小日向の口調から事情を察してくれたのか、マスターはそれ以上  
追及しようとしなかった。

『ちよっと待っててよ』

電話の向こう側でマスターと常連たちの相談する声が聞こえる。  
少し前までは自分もその中にいたのだと思うと、寂しさと懐かしさ  
が同時に湧いた。

『お待たせ。ここにいる連中の意見では旧初台駅はつだいしか思いつかない  
そうだ』

旧初台駅は京王線新宿駅の隣にある廃駅だ。六両編成の各駅停車  
だけが停まる駅だったが、十両編成の車両が停車できる新線初台駅  
が出来たために、その役目を全うまっとうした。

『電車の通過する廃駅だから条件には合致がっちしない。連中、神奈川ま  
で範囲を広げて検討してみると言ってる』

「おねがいます」

『第一、都内はヤバイ』

「どうしてですか」

『知らないのかい。要人が来日している訳でもないのにさ、各地下  
鉄の出入り口に警官がうようよしているらしいんだよ』

(くじく)